

日本通訳翻訳学会

第 23 回年次大会

スケジュール

基調講演

予稿集

2022 年 9 月 3 日(土)－4 日(日)
オンライン開催

日本通訳翻訳学会第 23 回大会スケジュール

開催日:2022 年 9 月 3 日(土)~4 日(日)
オンライン開催

第 1 日目 (9 月 3 日 土曜日)

13:00 13:30	評議員会		
13:40	総 会 (Zoom A)		
14:40			
14:50 15:20	理事会	(オンラインでの懇親の場として Remo をご利用いただけます)	院生コロキウム (Zoom B)
16:00	年次大会実行委員長本務校学長挨拶		
16:05	愛知県立大学学長 久富木原 玲		
16:05	基調講演 (Zoom A) 「相互行為としての通訳：理論的・考察的含意」 ストックホルム大学 通訳・翻訳学研究所 セシリア・ワデンショー教授 指定討論者： 水野 真木子（金城学院大学） 武田 珂代子（立教大学） 司会： 吉田 理加（大会実行委員長、愛知県立大学）		
17:35	Interpreting as Interaction: Theoretical and Analytical Implications Prof. Cecilia Wadensjö The Institute for Interpreting and Translation Studies Stockholm University Discussants: Prof. Makiko Mizuno (Kinjo Gakuin University) Prof. Kayoko Takeda (Rikkyo University) Moderator : Rika Yoshida (Organizing Committee, Aichi Prefectural University)		

第2日目（9月4日 日曜日）

会場	Zoom A	Zoom B	Zoom C	Remo
9:20	全体事項説明			
9:30	A-1 【司会：大久保 友博】 「中国語における数量詞の翻訳方略：莫言『蛙』の日本語訳を中心に」仁科陽江(広島大学)、鄧雨潔(広島大学D)	B-1 【司会：松下 佳世】 「大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト中間報告：日本全国の大学・大学院における通訳関連科目に関する調査」高橋絹子(関西大学)、大井川朋彦(日本大学)、石塚浩之(広島修道大学)、稻生衣代(青山学院大学)、内藤稔(東京外国語大学)	C-1 【司会：水野 真木子】 「医療通訳者の訓練歴と報酬満足度および職業継続意識に関する研究」鈴田佐和子(順天堂大学M)、浅井ゆかり(順天堂大学M・医療通訳)、何婕(順天堂大学M・医療通訳)、楊婧華(順天堂大学M・医療通訳)、ニヨンサバ・フランソワ(順天堂大学)、野田愛(順天堂大学)、大野直子(順天堂大学)	
10:00				
10:10	A-2 【司会：大久保 友博】 「近代の日本と中国における西洋文学翻訳の思想」劉丹(神戸大学D)	B-2 【司会：松下 佳世】 「コロナ禍における大学院レベルの通訳実習の企画と実践」西畠香里(東京外国語大学)	C-2 【司会：水野 真木子】 「法廷通訳の仕事に関する実態調査：2012, 2017, 2022年調査の分析から」水野かほる(静岡県立大学)、高畠幸(静岡県立大学)、坂巻静佳(静岡県立大学)、森直香(静岡県立大学)	
10:40				
10:50	A-3 【司会：藤濤 文子】 「明治時代における『宗教』の意味：翻訳語の観点から」松原深月(一橋大学D)	B-3 【司会：古川 典代】 「通訳の基礎訓練と演習の組み合わせ効果について：中国人日本語学習者を対象に」楊潔水(河南理工大学、東京都立大学)	C-3 【司会：水野 真木子】 “Pragmatic Issues in Interpreting the Silence of a Defendant at Trial” Jihyeon Kim(早稲田大学)	
11:20				
11:30	A-4 【司会：藤濤 文子】 「翻訳が提案した女性器名称の可能性を探る：『からだ・私たち自身』翻訳の意図と読者受容から」古川弘子(東北学院大学)	B-4 【司会：古川 典代】 「中国MTIコースの授業デザインと全国通訳・翻訳専門資格(水準)試験(CATTI)への取り組み例」平塚ゆかり(北京語言大学)	C-4 【司会：内藤 稔】 「英タイ同時通訳における直接話法と間接話法の使用：通訳利用者の視点から」スッカスイ・ベンチャラット(立教大学D)	
12:00				
休憩				
13:00	A-5 【司会：北代 美和子】 「村上春樹作品における〈関西弁〉の翻訳：イタリア語翻訳をケーススタディとして」山木戸浩子(藤女子大学)、カミッレーリ ガブリエレ(フィレンツェ大学D／大阪大学研究生)	B-5, 6 (60分枠) 「日本におけるトランスレーション・ボリシー研究事始め」武田珂代子(立教大学)、辛島デイヴィッド(早稲田大学)、宮田玲(名古屋大学)、島津美和子(立教大学 アメリカ研究所)、山田優(立教大学)、吉田理加(愛知県立大学)	C-5 【司会：内藤 稔】 「日中逐次通訳過程における言語処理のメカニズム：起点語言の難易度及び作動記憶容量を操作した実験的検討」宋啓超(広島大学D)	
13:30				

	Zoom A	Zoom B	Zoom C	Remo
13:40 14:10	A-6 【司会: 北代 美和子】 「ジブリ作品和伊訳翻訳者カンナルシ・グアルティエーロのパラテキスト上での受容について」 Bussi Mario (国際基督教大学 D)	B-5, 6 (60 分枠) 13:00 から継続	C-6 【司会: 篠原 有子】 “Meaning-making process in AV discourse: to revise multimodal transcription method” Sirui Cheng (Sophia University D)	
14:20 14:50	A-7 【司会: 佐藤 美希】 “The Polygenous Nature of the Translated Text: An Example of English–Japanese Translation in Diana Wynne Jones’s <i>Moving Castle</i> Trilogy” Irina Novoselova (Kansai University D)	B-7 【司会: 稲生 衣代】 「観光地の商店街における自動翻訳機の利用に関する実態と意識調査」細川真菜(関西大学 M)、高橋絹子(関西大学)	C-7 【司会: 篠原 有子】 「NAIST 同時通訳コーパスの構築: 翻訳字幕との比較と通訳経験年数に基づく分析」土肥康輔(奈良先端科学技術大学院大学 D)、須藤克仁(奈良先端科学技術大学院大学)、中村哲(奈良先端科学技術大学院大学)	懇親 スペース 自由に利用 できるよう 開放します。 情報交換や 質疑応答の 継続、ディス カッションなどにお使いく ださい
15:00 15:30		B-8 【司会: 稲生 衣代】 「翻訳プロジェクト策定プロセスに関する国際標準化の意義:包括的国際規格として『ISO17100: 2015』の役割」Andrew MIGITA-MEEHAN(株式会社ミーハングループ)、佐藤晶子(大阪観光大学)	C-8 【司会: 高橋 絹子】 「多言語通訳コーパスを活用した日英・日中・日西の訳出比較に基づく初期的考察」松下佳世(立教大学)、古川典代(神戸松蔭女子学院大学)、吉田理加(愛知県立大学)	
15:40 16:10		B-9 【司会: 佐藤 美希】 「通訳翻訳研究におけるデータセッションの有効性の検討」飯田奈美子(立命館大学)、齊藤美野(順天堂大学)、坪井睦子(立教大学)、蓮池通子(フリーランス手話通訳士)、水野真木子(金城学院大学)、吉田理加(愛知県立大学)	C-9 【司会: 高橋 絹子】 「同時通訳における情報保持:全体的処理と部分的処理」石塚浩之(広島修道大学)	
16:20 17:20				懇親会

- 研究発表は、発表 20 分 + 質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、Zoom のルーム移動のための時間です。
- 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。

※ Remo 利用案内

- ・ Remo は懇親スペースおよび懇親会会場としてご利用いただけます。
- ・ 右記が Remo の公式 HP です。利用方法などをご参考にしてください。 <https://jp.remo.co/>
- ・ 大会第 1 日目、2 日目の両日、自由に利用できるように解放しますので、情報交換や質疑応答の継続、ディスカッションなどに自由にお使いください。
- ・ 研究発表後の懇親会にもふるってご参加ください。
- ・ Remo に常駐する実行委員はありません。ご了承ください。

◎ 参加者の皆様へ

- 大会への参加は、以下の URL のオンライン申し込みフォーム(Google フォーム)でお申し込みください。学会 HP にもリンクがあります。また、学会員の皆様にはメーリングリストでもお知らせします。
 - ・年次大会申し込みフォーム: <https://forms.gle/C5q1dhDssE5cq3Cp7>
 - ・日本通訳翻訳学会ホームページ: <https://jaits.jp/>
- 返信用ハガキでの大会出欠確認は必要ありません。会員の皆様にはハガキを送付していませんので、ご了承ください。
- オンライン申し込みフォームの提出締め切りは、8 月 31 日(水)です。(手話通訳をご希望される方は、準備の関係上、8 月 10 日(水)までに申し込みフォームをご送信ください)
- Zoom ID とパスワード、および Remo のアクセス ID などは、オンライン申し込みフォームからお申し込みいただいた方々に、メールで 9 月 1 日(木)以降に送付する予定です。9 月 2 日(金)正午 (JST)になんでも、メールが届かない場合は、大会実行委員会(jaits2022taikai@gmail.com)までご連絡ください。
- 学会として、Zoom と Remo への参加に関わる技術的なサポートはいたしませんので、あらかじめご了承ください。
- 他者への Zoom ミーティング情報の転送・公開は、お控えください。
- Zoom ミーティング参加中の録音・録画・撮影は、ご遠慮ください。



◎ 発表者の皆様へ

- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿／二重発表、無断引用などには十分ご留意ください。
- 発表資料の提供については、各発表者の判断でお願いいたします。参加者に提供可能な場合は当日 Zoom のチャット機能で共有してください。発表後に資料提供に関する問い合わせがある場合は、各自で発表者とコンタクトを取っていただけますよう、お願ひいたします。
- 発表資料を画面共有する場合は、発表者ご自身でお願いします。
- ミーティングルームには余裕を持って入室してください。

[第 23 回年次大会実行委員会]

吉田 理加(委員長、愛知県立大学)、飯田 奈美子(立命館大学)、田村 智子(国際基督教大学)、蓮池 通子(手話通訳者)、宮田 玲(名古屋大学)

第 1 日目(9 月 3 日) 16:05-17:35

基調講演

(英-日および英-日本手話同時通訳付き)

「相互行為としての通訳：理論的・考察的含意」

ストックホルム大学 通訳・翻訳学研究所
セシリア・ワデンショー教授

指定討論者： 水野 真木子(金城学院大学)
武田 珂代子(立教大学)

司会： 吉田 理加(大会実行委員長、愛知県立大学)

Interpreting as Interaction: Theoretical and Analytical Implications

Prof. Cecilia Wadensjö

The Institute for Interpreting and Translation Studies
Stockholm University

Discussants Prof. Makiko Mizuno (Kinjo Gakuin University)
Prof. Kayoko Takeda (Rikkyo University)

Moderator: Rika Yoshida (Organizing Committee, Aichi Prefectural University)

基調講演要旨

通訳を介した相互行為に関する多くの研究は、公共サービス場面においてプロではない通訳者を使うリスクを指摘してきた。これらの研究は、通訳エラーや不適切な訳に焦点をあて、あたかも起点テクストと目標テクストを比較するかのように、通訳者の発話と原発話者の発話を比較してきた。しかし、通訳というものは、翻訳の一種としてではなく、講演者が“communicative pas-de-trois” (Wadensjö 1998:12) と呼んだ特殊なコミュニケーションの状況として捉えるべきあり、通訳者と单一言語話者の参与者との間の非言語を含むコミュニケーション行動が相互に影響しあっていることを示す研究もある。通訳を介した出会いを相互行為として捉えるというアプローチは、参与者間の状況づけられた意味の構築を考察するということと同時に、自然発話の相互行為を書記言語とは異なるものとして考察することでもある。

本講演では、医療場面や難民申請者のヒアリングなど、講演者が長年にわたって行ってきたさまざまな研究プロジェクトで収集された経験的談話データを利用し、通訳を相互行為としてとらえる研究アプローチや公共サービス通訳者の育成についての考察的意味について議論する。

Many studies on interpreter-mediated interaction have elucidated risks involved with assigning non-professionals to perform interpreting in public service encounters, focusing on errors and infelicities in the interpreters' renditions, comparing interpreters' utterances with primary parties' utterances as one would source texts and target texts. Suggesting to explore interpreting not just as a type of translation, but also as a specific kind of communicative situation, what I have called a “communicative pas-de-trois” (Wadensjö 1998:12), other studies have demonstrated the interdependence between interpreters and monolingual participants communicative – including non-verbal – behavior. Approaching interpreter-mediated encounters as interaction implies considering interlocutors' situated sense making, as well the nature of spontaneous spoken interaction as compared to written language. In this talk I will draw on empirical discourse data collected within various research projects I have conducted through the years, such as medical encounters and asylum hearings, and discuss the analytical implication of approaching interpreting as interaction in research as well as in the preparation of public service interpreters.

講演者プロフィール

Cecilia Wadensjö (セシリヤ・ワデンショ)



(撮影 Pia Nordin)

ストックホルム大学教授(通訳翻訳学)。1990年初頭から通訳を介した自然発生の組織談話を扱った研究を行い、論文、書籍を多く出版している。例えば、代表作の *Interpreting as Interaction* (Routledge)では、社会学者ゴフマンの参与枠組みなどを援用して、通訳者は透明な存在ではなく相互行為の参与者であり、訳すこと以外にもコミュニケーションの調整を担うなど様々な役割を果たしていることを示し、対話通訳研究の扉を開いた第一人者である。通訳の研究と実践に関する専門ジャーナル *Interpreting* 誌の編集委員も務めている。

第 2 日目(9月4日) Zoom A 9:30 – 10:00

A-1 司会: 大久保 友博

中国語における数量詞の翻訳方略について: 莫言『蛙』の日本語訳を中心に

仁科 陽江(広島大学)、鄧 雨潔(広島大学 D)

数量は人類が生産と生活の実践の中で徐々に形成してきたもので、その民族の文化を反映している。数量を表すとき数量詞が使われる。数量詞とは数詞「一、二、三…」と助数詞「本、匹、枚…」を組み合わせて物事の数量を表すものである。漢字の伝来とともに、漢語の数量詞も日本に定着し、日中両言語に数多くの数量詞がある。その中には中国語の数量詞の意味合いと用法がそのまま残されたものもあれば、中国語の数量詞から逸脱し、日本独自の意味合いと用法が生み出されたものもある。したがって、同じ漢字を使った数量詞であっても、意味合いが異なる場合もある。また、中国語には「一屁股坐下(どすんと腰を下ろす)」「一道道的闪电(次々と稲妻)」のような臨時数量詞や重ね型数量詞など、中国語の独特な使い方があるため、中国語の数量詞を日本語に翻訳する際に様々な工夫が必要となる。

本研究では、莫言の長編小説『蛙』に出現する数量詞を抽出し、吉田富夫による日本語訳『蛙鳴』を基に、数量詞を日本語に翻訳する際の翻訳方略を検討する。まず、Vinay & Darbelnet (1958) の 7 つの翻訳方略と Franco (1996) の異文化要素における 11 種の翻訳方略を参照し、数量詞を翻訳する際に重要なと思われる方略を「借用、帰化、転位、削除」の 4 つに分類した。調査の結果、最も多く使われている翻訳方略は削除で、47.1% (1155/2452) を占めていることが分かった。それに次ぐ帰化は 43.1% (1056/2452) である。この 2 つの翻訳方略だけで全体の 90.2% を占めており、圧倒的に多い。それに対して、転位は 8.1% (200/2452)、借用は 1.7% (41/2452) を占めるにすぎない。言い換えれば、中国語の数量詞の翻訳方略は主に削除と帰化だと言えよう。4 つの翻訳方略のうち、「借用」だけが起点テクスト志向に属しており、残りの 3 つの翻訳方略は目標志向に属している。しかも、起点テクスト志向の借用は全体のわずか 1.7% しか占めていない。このように、『蛙鳴』における数量詞の翻訳方略は明らかに目標テクスト志向であることが判明した。発表では、それぞれの翻訳方略の具体例を取り出して分析し、両言語における数量詞の機能的な違いを明らかにする。そのうえで、各翻訳方略における数量詞の特徴や翻訳方略を左右する要因を考察する。

【参考文献】

- Franco, J. A. (1996). Culture specific items in translation. In R. Alvarez & M. Carmen-Africa Vidal (Eds.), Translation, power, subversion. (pp. 52-78). Clevendon: Multilingual Matters.
Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). Stylistique comparée du français et de l'anglais. Paris: Didier.

第2日目(9月4日) Zoom A 10:10 – 10:40

A-2 司会: 大久保 友博

近代の日本と中国における西洋文学翻訳の思想

劉 丹 (神戸大学D)

本研究は、近代(19世紀後半から第二次世界大戦まで)の日本と中国における西洋文学翻訳について、歴史的・社会的な観点から翻訳思想の形成と変遷、および両国の影響関係を探ろうとするものである。

19世紀後半、西洋列強の脅威にさらされた日中両国は、翻訳を介して西洋の先進文化を学び、近代国家の建設と社会的啓蒙を進めることに努めた。西洋文学翻訳の萌芽・発展期にあたる近代において、翻訳活動は盛んに行われる一方で、体系的な翻訳理論はまだ確立されていない。しかし、翻訳家自身による序文や経験談、評論家による書評などの理論的言説は数多く残されており、当時の日中における翻訳思想を読みとることができる。

日中両国の翻訳思想に共通する背景は、同じ東洋文化圏に属し、長期にわたる文化交流を経験し、多くの文化的・言語的な類似点を有し、西洋との本格的な接触もほぼ同時期に始まったことである。とりわけ中国での西洋文学翻訳の初期には、在日中国人留学生の翻訳活動を通して日本の影響を深く受けている。しかし、実際の翻訳の傾向としては、日本では「異化」、中国では「同化」という異なる方向に進んでいた。その理由を辿るには、翻訳に関する諸言説を確認するだけでなく、それらが置かれている社会文化的文脈の中で改めて分析し直し、より深く掘り下げていく必要がある。また、日・中・西洋という三つの視点から比較を行うことで、一国の翻訳史の枠組みで見えてこなかったものを浮き彫りにしたいとも思う。

したがって本研究では、まず近代の日中両国の人々の社会背景と翻訳事情を確認し、次に(日本では森田思軒、野上豊一郎など;中国では嚴復、魯迅など)翻訳者による翻訳に関する言説を整理する。そして社会状況とともに変遷した翻訳観を分析し、翻訳にどのような機能が求められていたかを考察する。その上で、これらの言説の日中比較を通して、両国の西洋文学翻訳思想の共通点・相違点、およびその要因と影響関係を明らかにする。そこから、文学翻訳と社会文化との相互作用を再考し、翻訳の視点からの日中両国間の歴史的関係も見えてくるはずである。

第 2 日目(9月4日) Zoom A 10:50 – 11:20

A-3 司会: 藤濤 文子

明治時代における「宗教」の意味: 翻訳語という観点から

松原 深月(一橋大学 D)

明治時代に *religion* の翻訳語として採用された「宗教」は、主にキリスト教について論じられていた元々の西洋の文脈からは切り離され、日本国内の文脈に輸入された概念であった。*religion* が日本の文脈に適応した言葉に翻訳されるまでには、「宗門」「宗旨」といった様々な翻訳語が採用され、徐々にひとつの「宗教」という言葉に収斂していった。「宗教」という翻訳語が、近代日本社会でその地位を確立していく、国民ひとりひとりの生活に密接に関わる規則にまでその影響を広げるには、20年ほどの年月を有しており、「宗教」の意味自体もその間にダイナミックな変遷を遂げている。明治時代の宗教政策と並行して成立した「宗教」という言葉は 政治的イデオロギーと相互作用的に成立した翻訳語であると言える。

このことを踏まえて、本発表では、明治期に成立した数多くの翻訳語のひとつとして、「宗教」という言葉がいかにさまざまな政治的な動きに翻弄されながら成立し、その内部にどのような意味の矛盾が隠されているのか、そしてその矛盾はどのように引き起こされたのか、翻訳語の観点から考察することを目的とする。その目的で、本発表では、*religion* の翻訳語「宗教」について、明治初期を「翻訳語「宗教」の成立期」、明治 10 年代を「翻訳語「宗教」の定着期」、明治 20 年代を「日本の宗教概念の浸透期」と定義し、それぞれの時代の「宗教」にまつわる社会状況を *religion* の翻訳語の変遷とともに概観し、翻訳語の観点から分析する。

本発表では、明治日本における宗教概念の成立を *religion* の翻訳語の変遷と共に分析することで、翻訳語の成立過程で起こる意味の付与が「宗教」という翻訳語にはどのようになされたか考察し、それがどのように日本独自の宗教概念の成立に寄与しているのか明らかにしたい。そして、政治的イデオロギーを孕み、意味の矛盾が隠されているという「宗教」という翻訳語の特殊性に、その成立過程がどのように影響しているかを明らかにすることを目指す。

第2日目(9月4日) Zoom A 11:30–12:00

A-4 司会: 藤濤 文子

翻訳が提案した女性器名称の可能性を探る:『からだ・私たち自身』翻訳の意図と読者受容から 古川 弘子(東北学院大学)

『からだ・私たち自身』(ボストン女の健康の本集団訳, 日本語版翻訳グループ訳, 1988; 以下, OBOSJ と略す)は、日本の読者に「自分のからだは自分のものであり、自分からだについて知り、尊重することが大切だ」と説いた画期的な本であった。その最大の貢献のひとつは、女性器名称に「陰」や「恥」という漢字が使われることが女性器に対する否定的なイメージを作っているとして新しい女性器名称を提案したことだ(古川 2021a)。本発表の目的は、OBOSJ の提案が現代日本で受け入れられる可能性があるかを探るものである。

OBOSJ は現在では絶版だが、OBOSJ が提起した問題への日本社会の関心は当時よりも高まっていると考えられる。一例として、思春期の子供や大人向けの書籍だけでなく、幼児向けの性教育の本や小冊子でも、性別を問わず「自分のからだは自分のものだから大切にしよう」と説いている(遠見, 2022 [2021]; みやぎ助産師オンラインチーム M-MOT, 2022)。これは近年、世界的に主流となっている「包括的性教育」に基づいたものだ。また、親向けの性教育の本では「『陰』とか『恥』といったマイナスの価値観をともなって表す言葉は、あまり使いたくないですね」(フクチ&村瀬, 2021 [2020], p. 21)といった記述もある。

海外では言語変革の事例もある。スウェーデン語では、1960 年代に言語学者が性を限定しない三人称単数代名詞 ‘hen’ を提案し、40 年以上後の 2012 年から一般に使用され始めた(Sendén, et.al., 2015, p. 2)。2015 年にはスウェーデン・アカデミーの辞書に収録され、現在は定着した。OBOSJ の提案が今後、日本社会に受け入れられる可能性もあるのではないだろうか。

発表者はこれまで、OBOSJ と原書 *Our Bodies, Ourselves* (The Boston Women's Health Book Collective, 1984)との比較分析から、OBOSJ が重要なフェミニスト翻訳であると主張し、翻訳方略についての読者受容研究を行った(古川 2021a, 2021b)。また、翻訳作業の中心的役割を果たした荻野美穂氏にインタビューを行い、翻訳の意図などについて探ってきた(Furukawa 2022)。そこで本研究では、大学生へのアンケート調査を通して、インタビュー内容を受けて読者が OBOSJ の翻訳方略をどう受け止めるか、OBOSJ の試みがどのような影響をもたらしうるか、OBOSJ の問題意識が現在の日本社会でどう受容されうるか、同様の提案についてどのような可能性はあるか、などについて探ってゆきたい。

【参考文献】

- Boston Women's Health Book Collective (1971, 1973, 1976, 1979, 1984, 1998, 2005, 2011) *Our Bodies, Ourselves*. New York: Simon and Schuster.
- Furukawa, Hiroko (2022) Creating New Terms for Sexual Organs. AAS2022 Annual Conference. University of Hawaii, USA (口頭発表)
- Sendén, M. G., et al. (2015) 'Introducing a gender-neutral pronoun in a natural gender language', *Frontiers in Psychology*, Vol. 6, pp. 1-12.
- 遠見才希子(2022 [2021])『だいじ だいじ どーこだ?』大泉書店
- フクチマミ, 村瀬幸浩(2021 [2020])『おうち性教育はじめます』KADOKAWA
- 古川弘子 (2021a)「『からだ・私たち自身』(1988)が唱えたリプロダクティブ・ヘルス／ライツ」『通訳翻訳研究』第 21 号, pp. 77-96.
- 古川弘子 (2021b)「*Our Bodies, Ourselves* のフェミニスト翻訳の試みと読者受容」日本通訳翻訳学会第 22 回年次大会(口頭発表)
- ボストン女の健康の本集団, 日本語版翻訳グループ訳(1988)『からだ・私たち自身』松香堂
- みやぎ助産師オンラインチーム M-MOT(2022)『6歳までに伝えたい性のおはなし はじめの一歩』みやぎ助産師オンラインチーム M-MOT

第 2 日目(9月4日) Zoom A 13:00 – 13:30

A-5 司会: 北代 美和子

村上春樹作品における〈関西弁〉の翻訳: イタリア語翻訳をケーススタディとして

山木戸 浩子(藤女子大学)、カミッレーリ ガブリエレ(フィレンツェ大学 D・大阪大学大学院研究生)

フィクションには、標準語ではなく、地域変種を話す人物が登場することがある。特定の登場人物による特定の地域変種の使用は、キャラクター形成や場面の理解などの重要な役割を担っているが、作品が他言語に翻訳されるとき、地域変種による会話はどのように対応されるのか。

山木戸(2020, 2022)はこの問題の答えを探るべく、ケーススタディとして、村上春樹による小説のうち〈関西弁〉話者が登場する 7 作品 8 名の話し言葉とその英語翻訳を分析した。その結果、〈関西弁〉の会話は全て〈標準アメリカ英語〉に訳され、その人物が〈関西弁〉で話すという情報は読者に伝えられないことが多い。伝えられる場合、その情報は地の文で示され、原著にそう書かれているのがそのまま英語に翻訳されるケースと、翻訳者の判断でその情報が加筆されるケースが見られたが、どちらのケースであれ、起点テクストの〈関西弁〉に関わる記述が修正・削除されることなく、翻訳者は起点テクストに忠実な翻訳を試みていた。

本発表では、さらに地域変種による会話の翻訳について理解を深めるため、同じ村上作品の〈関西弁〉話者 8 名の会話がイタリア語翻訳版でどのように訳出されているかを考察する。イタリア語は日本語と同様に地域変種のバリエーションが豊かであり(Lepschy & Lepschy, 1988)、特定の地方の居住者・出身者と結びつくステレオタイプが存在する(ナポリ人は「冗談好き、声が大きい」、ジェノヴァ人は「ケチ、貪欲」、シチリア人は「ギャング、マフィア」など)。特にナポリの方言は、山内(2011)が「デ・フィリッポのナポリ語の人情喜劇が松竹新喜劇に比較できるように、ナポリ語は関西弁に比較でき、[…]」(p. 737)と指摘するように、〈関西弁〉に類似する言語的価値を持つと言われる。従って、村上作品における〈関西弁〉の話し言葉のイタリア語翻訳には〈ナポリ方言〉が投影されている可能性が期待できるが、実際は(英語翻訳版と同じように)全ての作品で〈標準イタリア語〉に翻訳されており、翻訳者は必要に応じて加筆を施すに留まった。本発表では、具体的にいくつかの例を考察しながら、目標言語にどんなに類似の言語的価値を持つ地域変種が存在していたとしても、やはり目標テクストで方言の再現は行われず、特定の地域ともっとも結び付けられにくく〈標準語〉が使用される傾向にあるということを示す。

【参考文献】

- Lepschy, A. L. & Lepschy, G. (1988). *The Italian Language Today* (2nd ed.). London: Routledge.
山木戸浩子(2020)「村上春樹作品における〈関西弁〉の英語翻訳について」『通訳翻訳研究への招待』第 22 号: 25-45. 日本通訳翻訳学会
山木戸浩子(2022)「村上春樹作品における〈関西弁〉は英語でどのように翻訳されるのか」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)』(pp. 1-24) 大阪大学大学院文学研究科
山内春彦(2011)「多様な民族言語」イタリア文化事典編集委員会(編)『イタリア文化事典』(pp. 736-737) 丸善出版

第2日目(9月4日) Zoom A 13:40–14:10

A-6 司会: 北代 美和子

ジブリ作品和伊訳翻訳者カンナルシ・グアルティエーロのパラテキスト上の受容について

Bussi Mario(国際基督教大学 D)

本研究はハイブリッド翻訳による異質的な要素に対する観衆やファンコミュニティーの反応を考察することで、イタリアの翻訳者であるカンナルシ・グアルティエーロ(Gualtiero Cannarsi)へのネット上で行われる批判を分析することを目的とする。さらにソーシャルメディアといったパラテキストの発達によるファンコミュニティーが得た権力に着目し、そこで行われるディベートがどのように翻訳された作品の普及へ影響を及ぼすかも考慮する。

パラテキストとはジュネット・ジェラール(Gérard Genette)が指摘するように作品に関する本文外のものであり、テキスト内での注釈、タイトルやブックカバーまでを示す。しかし、本研究に於けるパラテキストは、翻訳された映画の公開後にソーシャルメディア上で行われるディベートやカンナルシの翻訳課程についてのファンコミュニティーによる批判的な行為を指す。

その上で、このようなパラテキスト上で行われるカンナルシの翻訳課程に対する批評や討論がどのようにイタリア半島に日本文化的意識を普及させ、日本作品の流通に貢献しながら異文化意識を深める、いわゆる thick description (Hermans, 2003) が行われるスペースとなっているかについて論証する。

スタジオ・ジブリ作品のイタリア語訳は日本文化的要素を含み、このハイブリッドなテキストはカンナルシの訳し方の特徴としてイタリアの観客に認識されることから、翻訳者の存在が作品の中で明らかになる。すなわち、カンナルシは異化(foreignization)を翻訳方法として使用することで、イタリア観客に違和感を感じさせると共に、スタジオ・ジブリ作品の日本性を認識させていると見られる。又、カンナルシの翻訳スタイルはネット上での討論を促進しただけではなく、イタリア半島に流通する日本についての文化的意識の普及や固定概念の構築に貢献していると言える。

本研究では日本語の言語的・文化的要素がどのようにイタリア語に訳出されているかをジブリ映画のカンナルシ翻訳を引用し、具体的な例を挙げながら論じる。特にカンナルシの翻訳過程に於けるキャラクターのアイデンティティー形成及び、イタリアの観客に対する提供方法に着目して調査を行う。本研究ではカンナルシ翻訳のイタリアでの日本文化的意識の普及への貢献と、パラテキスト上で行われるディベートを通して翻訳者のステータスがハイパービジブルとなることを明らかにする。

【参考文献】

Genette, G. (1991). Introduction to the Paratext. (M. Maclean, Ed.) *New Literary History*, 22 (2), 261-272.

Hermans, T. (2003). Cross-cultural translation studies as thick translation. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 66(3), 380–389.

Venuti, L. (2004). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.

第 2 日目(9月4日) Zoom A 14:20 – 14:50

A-7 司会: 佐藤 美希

The Polygenous Nature of the Translated Text: An Example of English–Japanese Translation in Diana Wynne Jones’s *Moving Castle* Trilogy

Irina Novoselova (Kansai University, D)

In the field of Translation Studies, the creation of a translated literary text was conventionally attributed to the lone figure of a translator, who mediates between the author and the reader as well as between cultures and languages. However, this study, which is a distillation of my Ph.D. dissertation, draws on aspects of polysystem theory to move from regarding a given literary translation as a static one-dimensional textual replica created and further modified by the translator, to evaluating it as a composite, polygenous product with more than one originator.

The *Moving Castle* series (1986–2008) written by the British fantasist Diana Wynne Jones and its Japanese translation are used to illustrate the issue. The trilogy was translated into Japanese and published by Tokuma Shoten between 1997 and 2017 and is currently available in Japanese bookstores in various wondrous editions. A close examination of the hardcover (*tankōbon*) and paperback editions (*bunkobon*), as well as comparison of the numerous reprintings, showed that the translated texts diverged on various levels, from the most apparent (external: format, size, cover illustrations, design), to the less visible (auxiliary: information about publishing date and edition number, paratexts, text arrangement), through to features almost invisible to an ordinary reader (linguistic: style, lexis, structure, orthography, punctuation, etc.). In other words, what initially seemed to be identical Japanese translations wrapped in different packages presumably for the sake of enhanced sales were, *de facto*, quite different *products*. In examining the nature of these discrepancies, it became apparent that other factors besides the translator influenced the creation and subsequent modification of the trilogy’s translations.

This study thus presents the English–Japanese literary translation of the *Moving Castle* trilogy as a multicomponent *product* created by discrete physical and abstract *agents*. Within the framework of this study, the influence of such creative forces as 1) Japanese translation conventions, 2) characteristics of the niche of children’s literature in Japan, 3) Japanese language policies, 4) translators, and finally 5) Studio Ghibli’s anime adaptation *Howl’s Moving Castle* (2004) is addressed and each entity’s agency in the process of translation production is demonstrated.

Due to the heterogeneity of the agents, this research strongly relies on Even-Zohar’s (1979) polysystem theory (based on the principle of analyzing the object in relation to other elements from the standpoints of different systems, rather than in isolation), approaching the English–Japanese translation of the *Moving Castle* series from diverse but interconnected perspectives.

【Reference】

Even-Zohar, I. (1979). “Polysystem Theory.” *Poetics Today* 1, no. 1–2 (Autumn 1979): 287–310.

第2日目(9月4日) Zoom B 9:30–10:00

B-1 司会: 松下 佳世

大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト中間報告：日本全国の大学・大学院における通訳関連科目に関する調査

高橋 絹子（関西大学）、大井川 朋彦（日本大学）、石塚 浩之（広島修道大学）、稻生 衣代（青山学院大学）、内藤 稔（東京外国語大学）

「大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト」は 2005 年に行われた「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」(染谷ら, 2005)のフォローアップ調査を目的とするものであったが、実際にアンケートを実施する直前にコロナ禍となり、急遽、通訳教育に関する遠隔授業の調査を行った。(高橋ら, 2021) その後、本来の目的であった「全国の大学・大学院における通訳教育に関するアンケート調査」を 2022 年 5 月に実施した。本調査の主な目的は、前回の調査(染谷ら, 2005)からすでに 17 年の年月を経ていることから、再度同趣旨の調査を行い、データを更新することであった。従って、前回のアンケートをたたき台とし、17 年という時代の変化に即した質問項目への変更や選択肢への入れ替えを行うとともに、新たな質問項目も若干付加した。

アンケート調査を実施するにあたり、まず全国の大学・大学院に設置されている通訳コースの数ができるだけ正確に把握することを第一の目的とした。そのために、インターネット上で全国の大学・大学院のリストを検索し、それらの大学・大学院 810 校の教務担当者宛てに、郵便にて 2 枚の用紙を送付した。1 枚目では、通訳の授業の「あり」「なし」「不明」の 3 つの選択肢から該当するものを選択し、マルをつけて同封の受取人払いの封筒に入れ、無記名で投函してもらうこととした。さらに通訳関連の授業が「あり」を選択した場合には、通訳関連科目的担当教員に同封したもう 1 枚のアンケート依頼の用紙を渡してもらうように依頼した。その用紙には、2005 年に実施したアンケートに即して作成した Google Forms を用いたアンケートの QR コード、ならびにアンケートの URL を記載し、非常勤を含めた通訳担当の教員にアンケートへの参加の依頼を行った。

その結果、2022 年 5 月末現在で、810 校中、384 校から返信があり、そのうち通訳コースが「あり」と回答した大学・大学院の数は 60 校であった。さらに Google Forms を用いたアンケートの回答者は、2022 年 5 月末現在で、53 名に及んでいる。

今回の発表では、全国の大学・大学院における通訳教育の実態を調査の結果を発表し、通訳関連科目の授業に関する知見を参加者と共有することも目的とし、今後の研究に活用する。

【参考文献】

- 染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稻生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号: 85-310.
 高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稻生衣代・内藤稔 (2021) 「日本の大学・大学院における通訳科目の遠隔授業に関する調査報告」『通訳研究』第 21 号: 141-162.

第 2 日目(9月4日) Zoom B 10:10 – 10:40

B-2 司会: 松下 佳世

コロナ禍における大学院レベルの通訳実習の企画と実践

西畠 香里（東京外国語大学）

大学院における通訳実習の企画と実践について、新型コロナウイルス感染拡大防止に対応した取り組み事例を示す。筆者が所属する大学では、2004 年から大学院レベルでの通訳教育が開始され、通訳実習が修士 2 年次の必修科目となっている。2020 年以降は、新型コロナウイルスの影響により、通訳業界を取り巻く環境が大きく変化したのと同様、大学院の通訳教育を取り巻く環境も大きく様変わりしている。

2020 年には新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、オンライン授業が急速導入されることとなり、通訳科目もオンラインで指導する必要性が生じた。従来の通訳実習は、外部からスピーカーを招いて講演会を開催して、大学院生が同時通訳ブースで同時通訳を行う対面の形態が主流となっていた。しかしながら、感染症拡大防止対策の観点からは、参加者を集めて対面でイベントを行うことは望ましくない状況となった。コロナ禍の通訳業界への影響を調査した松下 (2020) では、遠隔同時通訳 (RSI: Remote Simultaneous Interpreting) の需要が加速したことが示されている。

コロナ禍による制約がある中で、通訳業界の動向も意識したより実践的な学びの機会を創出するために、2020 年度からは、遠隔同時通訳による通訳実習を導入している (西畠 2022)。さらに、コロナ禍の対応が求められるようになって 3 年目を迎えた直近の 2022 年度は、オンラインと対面を組み合わせた通訳実習の企画と実践を行っている。

大学院レベルでの通訳実習を企画する際にはどのような項目を考慮する必要があるか、どのようなタイプの実習が選択肢として考えられるかを示し、直近の事例も含めたこれまでの実践をもとに、それぞれの特徴を提示する試みを行う。コロナ禍での対応も含め、大学院レベルでの通訳実習の具体的な事例の情報は乏しいため、今後の通訳実習の企画や実践に活用され、大学院の通訳教育発展に資することを期待する。

【参考文献】

西畠香里 (2022) 「オンラインによる同時通訳実習の企画と実践—学部・大学院のコラボレーション授業の事例から—」『東京外国語大学論集』103: 51-67.

松下佳世 (2020) 「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』20: 125-146.

第2日目(9月4日) Zoom B 10:50–11:20

B-3 司会: 古川 典代

通訳の基礎訓練と演習の組み合わせ効果について:中国人日本語学習者を対象に

楊 潔氷(河南理工大学、東京都立大学)

本研究は昨年の通訳授業での訓練効果をふまえ、訓練方法とテスト内容を改善したものである。授業はウォーミングアップ、通訳の基礎訓練と演習を中心に実施した。実施日程は2021年8月31日～12月14日であり、週一の頻度で計15回であった。1～3回目は基礎知識を中心にリモート講義を行い、4～7回目は対面で通訳の基礎訓練を行った。なお、3回目の授業の前に、聴解能力や翻訳能力を測るためのテストを行った。8～14回目は基礎訓練を挟みながら、通訳演習を行った。ピア通訳演習が受講者数の多いクラスに適しているとの報告(e.g., 山崎・石原, 2020)をふまえ、今回の通訳演習も三人ピアで行った。15回目の授業でテストを行い、12月28日に期末試験があった。前年と違い、母語での5分間発表を毎回3人ずつにさせ、日中文化や歴史と関連する謡の翻訳を取り入れた。

テストの内容は聴解問題(会話聴解選択問題5問と文章穴埋め8箇所)、日本語文章の要約問題、日中・中日聴訳¹問題(單文各3つと段落各1つ)であった。期末試験には聴解問題と聴訳問題が含む。なお、期末試験における聴解選択問題は訓練前後の両方のものを援用し(便宜上、期末-前と期末-後にする)、文章穴埋め問題は訓練前のと同様であった。聴訳問題は、訓練前後と期末では同様の音声材料を用いた。受講者数26名のうち、8名が訓練前のテストに参加しなかったため、18名の成績を分析対象とした。結果は表1と表2に示す。

表1 聽解問題と要約問題の成績の平均点と標準偏差

会話聴解選択問題(満点10点)			穴埋め問題(満点8点)			要約問題(満点10点)		
訓練前	訓練後	期末-前	期末-後	訓練前	訓練後	期末-前	訓練後	
7.11 (1.91)	8.89 (1.20)	8.33 (1.67)	9.78 (0.63)	5.00 (1.57)	5.64 (1.52)	5.78 (1.93)	5.61 (2.14)	6.89 (2.26)

表

2 聽訳問題の成績の平均点と標準偏差

日中単文聴訳(15点)			中日単文聴訳(15点)			日中段落聴訳(6点)			中日段落聴訳(6点)		
訓練前	訓練後	期末	訓練前	訓練後	期末	訓練前	訓練後	期末	訓練前	訓練後	期末
3.11 (2.05)	8.31 (4.43)	11.03 (4.84)	5.72 (2.26)	6.94 (1.99)	9.17 (3.29)	1.78 (0.98)	2.83 (1.57)	3.11 (2.05)	2.28 (0.56)	3.00 (0.88)	3.28 (0.87)

聴

解選択問題の成績に関する分散分析と下位検定の結果、訓練後は訓練前よりも成績が有意に高かつた($t(17)=3.93, p<.001, r=.48$)。穴埋め問題と要約問題の成績は、主効果が有意ではなかった($F(2, 53)=1.95, p=.158, \eta^2=.04, F(1, 35)=2.98, p=.102, \eta^2=.08$)。単文聴訳と段落聴訳の成績に関する分散分析の結果、日中単文聴訳では、訓練後と期末は訓練前の成績より有意に高かつた($t(17)=4.10, p<.001, r=.58, t(17)=6.25, p<.001, r=.73$)。段落聴訳も同様の結果であった(日中: $t(17)=2.37, p=.024, r=.38, t(17)=2.99, p=.005, r=.46$, 中日: $t(17)=3.18, p=.003, r=.48, t(17)=4.41, p<.001, r=.60$)。他方、中日単文聴訳では、期末は訓練前後の成績より有意に高かつた($t(17)=4.20, p<.001, r=.59, t(17)=2.71, p=.010, r=.42$)。つまり、通訳の基礎訓練と演習の組み合わせは聴解能力ひいては日中聴訳能力の向上に寄与できたが、中日単文単位の聴訳に関しては検討する余地がある。

【注】

1. 本研究における聴訳とは日本語/中国語を聞き中国語/日本語に翻訳することを指す。

第 2 日目(9月4日) Zoom B 11:30 – 12:00

B-4 司会: 古川 典代

中国 MTI コースの授業デザインと全国通訳・翻訳専門資格(水準)試験(CATTI)への取り組み例

平塚 ゆかり(北京語言大学)

中国では 2003年から全国通訳・翻訳専門資格(水準)試験(略称:CATTI)を国家レベルの職業資格試験として行なっている。これは中国全土で実施される通訳・翻訳資格認証制度であり、中国職業資格リストに組み入れられている国家資格である。現在、試験レベルは4ランクに分かれている。2003 年の開始当時は中国語と英語間のみの試験であったが、2004 年には日本語、フランス語が追加され、現在は中国語と英語、日本語、フランス語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語、アラビア語、朝鮮語/韓国語の8 言語間の通訳・翻訳試験が行われている。また、2020 年からは海外で受験できる CATTI 国際版(略称:Inter CATTI)の試験も実施され、こちらは現在、中国語と英語、日本語、朝鮮語/韓国語間の通訳・翻訳試験が行われている。

日本の文科省にあたる中国教育部の規定によれば、中国の翻訳通訳修士専門学位(Master of Translation and Interpreting, 略称:MTI) コースの学生は全員、在学期間に CATTI 2 級以上の受験が必須となっている。試験の合否状況は MTI 教育成果の指標として用いられるため、現在中国に 300 校以上ある大学院の MTI コースでは、市販の CATTI の過去問題集をそのまま授業の教材として使用する大学も少なくない。しかしながら、過去問題は主に短文逐次通訳を行う設問が中心となっており、コンテクストの説明なしに次々に多岐にわたる分野の短文逐次を行う内容となっている。「幅広い分野の長文逐次・同時通訳力の向上を図る」としている MTI コースの学生に対する育成目標とはそぐわない点が多い。発表者は 2019 年より北京語言大学の MTI コースで逐次通訳、同時通訳を教えているが、直接この過去問題集を使用しての授業は行なっていない。しかしながら、学生としては CATTI の試験結果がその後の就職活動に影響するため、試験対策授業のニーズは少なからずある。そのため、本学では 2021 年度後期から院生有志による勉強会を開催し、CATTI 問題集を使った通訳訓練を開始した。訳出へのフィードバックも学生同士で行い、フィードバックの結果は S N S の WeChat ミニプログラムで対外的に公開している。人の目に晒すことで緊張感を保ちながら通訳訓練を行なっている。

本発表では、CATTI 対策としての授業デザイン、教員側および学生側の取り組み例、受験成果を紹介する。また、今後日本でも受験者が増えると予想される CATTI 国際版についても紹介する。

第2日目(9月4日) Zoom B 13:00 – 14:00

B-5, 6 (60分枠)

日本におけるトランスレーション・ポリシー研究事始め

武田 珂代子(立教大学)、辛島 デイヴィッド(早稲田大学)、宮田 玲(名古屋大学)、島津 美和子(立教大学アメリカ研究所)、山田 優(立教大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

翻訳通訳関連の政策や事業(トランスレーション・ポリシー、以下TP)に関する研究は、複数の公用語や少数民族を有する、あるいは移民の多い欧米の国や地域が中心となって行われてきた。加えて、近年では、テクスト分析に基づく韓国外務省の TP 研究(Choi, 2022)や、複雑性理論(complexity theory)を援用して中国少数民族対象の法廷通訳政策を分析した研究(Li, 2018)など、アジアの事例も提示されている。日本においても、政府・自治体が、翻訳通訳サービスの提供や翻訳通訳を介した業務を日常的に遂行しているが、そうした施策や事業を対象とする体系的研究は未開拓である。本発表では、日本政府・自治体の TP について考察する目的で立ち上げたプロジェクトの初年度活動内容と今後の研究計画について報告する。

まず、本プロジェクトの背景と目的、また、基礎固めとして行った先行研究の検討やゲストスピーカー(行政学研究者、韓国・中国の TP 研究者)との研究会の概要を述べる。特に、先行研究において、TP という用語の使い方や研究対象が多種多様であることから、TP 研究においてはまず、プロジェクト内の TP の定義と研究範囲を明確にする必要性を強調する。また、言語政策研究や行政学など隣接学問領域における概念や手法に目を向ける学際性が研究を効果的に進める上での鍵となることを説明する。とりわけ、言語政策研究における「言語実践 (practice)、信念(belief)、管理(management)」といった概念の有効性(González Núñez & Meylaerts, 2017)、また、政策を形成・展開する行政組織や人材管理などに注目する行政学の視点を取り込む手法に触れる。さらに、従来の TP 研究が焦点を置いてきた国内向けの TP に加え、政府による対外的な情報発信や外交・安全保障上の立場表明、パブリック・ディプロマシーにおける文化事業などに伴う TP についても検討することを提案する。

次に、TP の視点から日本の文脈で展開する実証研究における主題や方法の可能性について述べる。具体的には、政府関連の日本文学翻訳事業の現状、自治体の多言語対応における機械翻訳の利用、ボランティア通訳や子どもの通訳などに対する政府関係組織の態度(イデオロギー)、政府・自治体関係者の翻訳リテラシー向上を目指した産学協同の取り組み(機械翻訳利用ガイドラインなど)について進行中のプロジェクトや研究計画を紹介する。最後に、日本における TP の課題に光を当て、解決の道筋を探るという本プロジェクトの最終目標に触れる。

【参考文献】

- Choi, J. (2022). *Government translation in South Korea: A corpus-based study*. Routledge.
- González Núñez, G. & Meylaerts, R. (2017). *Translation and public policy: Interdisciplinary perspectives and case studies*. Routledge.
- Li, S. (2018). Translation and interpreting policies in China: Ethnic linguistic minorities in the judicial system. In E. Monzó-Nebot, & J. Jiménez-Salcedo (Eds.), *Translating and interpreting justice in a postmonolingual age* (pp. 111-126). Vernon Press.

第 2 日目(9月4日) Zoom B 14:20 – 14:50

B-7 司会: 稲生 衣代

観光地の商店街における自動翻訳機の利用に関する実態と意識調査

細川 真菜(関西大学大学院 M)、高橋 絹子(関西大学)

本研究は日本の観光地の商店街における自動翻訳機の社会実装に関する調査を扱ったものである。この数年、機械翻訳は従来の「単語ごと」の翻訳から、文章の流れを分析して自然な訳出ができるニューラル機械翻訳(NMT)へと、その精度は目覚ましく発展している。Yamada(2019)は、NMT の品質結果体感知負荷、修正量、エラーの種類に関して学生の訳出を比較することでその精度を検証した結果、ニューラル機械翻訳の訳出は平均 TOEIC900 点レベルの学生以上の性能に達していると結論づけた。テレビコマーシャルなどでは見る人に対して、自動翻訳機があれば商談は難なく進むような印象を与えていている。こうした中、インバウンドの急増を受け、例えば国際的な観光都市として知られる京都では、コロナ禍以前の 2018 年には外国人宿泊客数は過去最高となる 318 万人を記録し、アジア諸国を中心に多くの観光客が海外から訪れている(日本政府環境局)。しかし、たとえそのような便利で高性能な自動翻訳機が存在するとしても、実際には自動翻訳機は市中ではどの程度、すでに用いられており社会で認知されているのであろうか。

本課題を調査するために、コロナ禍以前の日本において訪日観光客が多数訪れていたと思われる関西圏の商店街でアンケート調査を行った。アンケートの配布総数は 278、有効回答数は 56 である。伝統工芸品や日本食など、訪日観光客への販売促進にあたり商品説明などのコミュニケーションが必要であると考えられる商品を扱っている商店を対象とした。商店街の連合会などに配布を依頼し、受取人払い封筒で返送してもらう形で収集した。アンケートは無記名で、参加者には調査結果は研究目的でのみ利用されることを明記し、参加の同意を得た。アンケートの内容は、翻訳機を見たこと、使ったことがあるか、商店の立場から見たそれらを導入する具体的なメリットやデメリット等である。その結果、翻訳機を使ったことのない参加者は全体の約 47 %で、そのうち約 28% にはその存在すら、知られていないということが分かった。しかし、参加者の多くがコロナ禍収束後のインバウンドの復活に期待を寄せており、約 62% がこのような機械を「使ってみたい」と回答したことからも、この問題に関する関心の高さが認められる。

【参考文献】

Yamada, M. (2019). "The impact of Google Neural Machine Translation on Post-editing by student translators". *The Journal of Specialised Translation*, 31 :87-106.

日本政府観光局(JNTO)インバウンド戦略部 調査・コンサルティンググループ「訪日外国人旅行者の消費動向とニーズについて—調査結果のまとめと考察—」

https://www.jnto.go.jp/jpn/projects/research_consulting/cq6g7o000002hw5-att/project_data.pdf

(2022 年 5 月 22 日)

第2日目(9月4日) Zoom B 15:00 – 15:30

B-8 司会: 稲生 衣代

翻訳プロジェクト策定プロセスに関する国際標準化の意義:包括的国際規格としての『ISO17100:2015』の役割

Andrew MIGITA-MEEHAN(The Meehan Group)、佐藤 晶子(大阪観光大学)

本発表は、発行から7年を経た現行の『ISO17100:2015 翻訳サービス-翻訳サービスに関する要求事項』(以下『ISO17100:2015』といふ)の規定を俯瞰し、プロジェクトマネージャーとして時流に沿った翻訳サービス提供者(TSP)の業務について考察することを目的とする。

『ISO17100:2015』は発行から5年を経た2020年、改訂を行わないことがPメンバー国による投票で確定した。AIの発展やコロナ禍による急速なオンライン化による環境の変化により、同規格の附属書Aで示された組織内翻訳サービス提供者の翻訳ワークフロー(ISO,2015,p12)をはじめ、用語の定義、業務上欠かせないプロジェクト責任者の範囲等、『ISO17100:2015』の規定に対する要求度が以前にも増して強くなっている。次の5年を待たずに早期見直しを行うべきかという問い合わせは、『ISO18587:2017 Translation services-Post-editing of machine translation output-Requirements.(翻訳サービス-機械翻訳出力のポストエディット要求事項)』(以下『ISO1858:2017』)(ISO, 2017)の5年改訂の投票と相まって、無視することができない状況となっている。

そのため、『ISO17100:2015』附属書E掲載の翻訳メモリー(TM)やコンピュータ支援翻訳(CAT)ツールを使った翻訳(ISOa,2015,p17)、機械翻訳(MT)の進化等の現状を分析する。そして、附属書B、B3bで許容されている「翻訳者自身によるバイリンガルチェック」の頻度についても注目し(ISOa,2015,p13)、同規格冒頭の「適用範囲(Scope)」に追記する必要があるかどうかを検討する。

国際標準化機構の翻訳、通訳および関連技術の国際規格を策定する第37委員会(ISO/TC37)は言語と専門用語に関する標準化を広く取り扱う。我が国の製造業をはじめとする産業のグローバル化に伴い、重要な役割を果たす翻訳・通訳について第5分科会(SC5)を設置して活動している。このISO/TC37/SC5で策定された『ISO17100:2015』発行以来、日本で60件近い認証取得TSPが誕生したが、その総数はコロナ禍を経た現在8件減数している(JSA, 2021, <https://shinsaweb.jsa.or.jp/MS/Service/ISO17100>)。本発表は、一般企業・団体・大学・研究機関の『ISO17100:2015』のさらなる利活用の場を検討する。

本発表は、経済産業省採択「戦略的国際標準化加速事業」の「翻訳プロジェクト策定プロセス、観光通訳および情報付与プロジェクト管理に関する国際標準化」のうち「翻訳プロジェクト策定プロセス」に関する共同研究について発表するものである。

【参考文献】

- ISO. (2015). *ISO17100:2015 Translation services--Requirements for translation services*. Geneva: ISO.
- ISO. (2017). *ISO18587:2017 Translation services-Post-editing of machine translation output-Requirements*. Geneva: ISO.
- 日本規格協会ソリューションズ (2019)「ISO 17100 認証取得組織」「日本規格協会ソリューションズ審査登録事業部」(<https://shinsaweb.jsa.or.jp/MS/Service/ISO17100>)

第 2 日目(9月4日) Zoom B 15:40 – 16:10

B-9 司会: 佐藤 美希

通訳翻訳研究におけるデータセッションの有効性の検討

「通訳翻訳研究における会話・談話分析の展開」研究プロジェクトメンバー

飯田 奈美子(立命館大学)、齊藤 美野(順天堂大学)、坪井 瞳子(立教大学)、蓮池 通子(フリーランス手話通訳士)、水野 真木子(金城学院大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

データセッションとは、あるデータを異なる研究背景をもつ複数の研究者が同時に観て、そのデータから読み取れる事柄についての気づきやデータの観方に関する意見を交換し、当該データの多様な観方を共有する方法である(cf. 池谷 2016)。「通訳翻訳研究における会話・談話分析の展開」研究プロジェクトでは、通訳翻訳実践データを題材にデータセッションを行い、通訳翻訳研究におけるデータセッションの有効性を検討している。2021 学会年度の活動として、心理学・社会学領域の専門家からデータセッションやデータ分析について学び、今・来年度で分析を行うデータの選定を行った。本発表では、1. 他領域におけるデータセッション等の実践方法を踏まえ、発表者らが目指す通訳翻訳研究におけるデータセッションの活用方法について、また、2. 発表者らの実践にもとづき、通訳翻訳研究におけるデータセッションのデータ選定方法について発表者らが重視する点について報告する。

まず、データセッションの活用方法について、以下 2 点のような有効性が認められた。ひとつは、「通訳翻訳行為」について他領域の専門家と認識のずれがある場合などにおいて、データを共にみることにより通訳翻訳研究者や他領域専門家の観点について気づきを与えるツールとなること、もうひとつは、映像やテキストを何度も見返しながら話すことは、通訳翻訳行為を改めて言語化することになるため、それがどのようなものかを再認識するツールになることである。

また、今年度はドキュメンタリ作品『ナディアの誓い』(2018)を選定し、通訳行為がどのように表象されているかの分析を行うことになった(2022 学会年度も継続予定)。データの選定は、①商業作品中の登場人物が携わる通訳行為であること、②通訳実践(話者と通訳者との順番交替により言語の訳出がなされている)場面が映し出されているもの、③ドキュメンタリ作品において「通訳行為」がテーマの表現に影響を与えているものを考慮して行った。そして、映像データの中でデータセッションを行う箇所を選定した。本発表では、データセッションを行う箇所の説明と選定理由を述べ、登場人物や焦点化される事象、視聴者に訴えかけるテーマに通訳行為がどのような影響を与えているかについて、2021 学会年度中に行った議論の内容を報告する。データセッションの有効性の検討結果を共有し、フロアからも意見を募りたい。

【参考文献】

池谷のぞみ(2016)「フィールドワークとデータセッションで気をつけること:エスノメソドロジーの態度とは」『現象と秩序』4. 99-118

第2日目(9月4日) Zoom C 9:30–10:00

C-1 司会: 水野 真木子

医療通訳者の訓練歴と報酬満足度および職業継続意識に関する研究

鈴田 佐和子(M)、浅井 ゆかり(M)、何 婕(M)、楊 靖華(M)、ニヨンサバ・フランソワ、野田 愛、大野 直子(順天堂大学)

【背景・目的】

近年、日本における在日外国人数が増加している。在日外国人が受療する際に、言葉や文化等の壁を越えてコミュニケーションの支援をするのが医療通訳者である。医療通訳が医療に関する専門的な会話を理解するためには訓練が欠かせない。しかし、これまで医療通訳者の訓練の現状と報酬満足度および職業継続意識との関連について調査した研究は見当たらない。

本研究の目的は、医療通訳者の訓練歴と職業継続意識について質問紙調査により明らかにすることである。

【方法】

2022年1~2022年2月、電話医療通訳派遣団体Mに登録されている通訳者約248名および全国規模の医療通訳者団体Nに登録されている医療通訳者約305人を対象に、GoogleFormを用いた質問紙調査を実施した。調査では医療通訳の訓練状況及び医療通訳歴、今後どのような訓練を希望するか、報酬満足度、職業継続意識について質問し、医療通訳歴と報酬満足度、職業訓練意識について χ^2 二乗検定で検討した。また自由回答にて医療通訳に対する考え方を聞いた。

【結果】

回答期間は2022年1月12日から2022年2月28日、回答者は55人(男性7名、女性48名)であった。回答者のうちなんらかの訓練を受けた人は45人であった。訓練歴は100時間以上が21人(38%)、80時間以上が27人(49%)であった。訓練を受けた機関はNGO・NPOが主催する研修が最も多く24人(43.6%)、次いで通訳学校の医療通訳養成講座10人(18.2%)、大学・大学院の医療通訳養成講座4人(7.3%)であった。

回答者のうち45人(98%)が、機会があればさらに訓練を受けたいと回答していた。今後受けたい訓練としては正確な通訳のためのトレーニングが38人(69.0%)、医療用語や人体に関するトレーニング34人(61.8%)、遠隔通訳(ビデオ通訳・電話通訳)スキルに関するトレーニング28人(50.9%)であった。

報酬満足度については「適正」との回答が22人(40.0%)、「少ない」・「どちらかといえば少ない」との回答の合計が33人(60.0%)であった。一方で92.7%の回答者が医療通訳の仕事を「長く続けたい」、「できるだけ長く続けたい」と回答しており、職業継続意識は高い傾向にあった。通訳訓練歴と報酬満足度は有意に関連していたものの($P<0.002$)、医療通訳者の訓練歴と職業継続意識には有意な関連は認められなかった。自由記入欄では医療通訳の仕事にやりがいを感じつつも報酬、待遇の改善を求める声が多く、また利用者である患者・医療者側に訓練された医療通訳者の必要性への理解を望む声も聞かれた。

【考察】

調査の結果、医療通訳者の約半数が80時間以上の長期訓練歴を有していた。訓練歴が長いほど報酬満足度は低かったが、低い報酬満足度にもかかわらず、職業継続意識は高い傾向にあった。今後の課題として医療通訳者の必要性に対する患者・医療者の認識の向上、報酬と待遇の改善が示唆された。

【参考文献】

総務省自治行政局住民制度課 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数のポイント
[Online]https://www.soumu.go.jp/main_content/000762453.pdf(2021年1月1日)

第 2 日目(9月4日) Zoom C 10:10 – 10:40

C-2 司会: 水野 真木子

法廷通訳の仕事に関する実態調査:2012, 2017, 2022 年調査の分析から

水野 かほる、高畠 幸、坂巻 静佳、森 直香(静岡県立大学)

1. 研究の目的

日本に滞在・定住する外国人の増加に伴い、日本語を解さない被告人や証人が法廷に立つ場合の通訳や翻訳の必要性と重要性が高まっている。法廷通訳は高い正確性が求められ、高度な言語能力と通訳技能、守秘義務、通訳倫理が必要とされる。しかしながら、負担は非常に大きいが、資格認定制度はなく、身分保障もない。そこで、その実態と必要な制度的配慮を把握し、改善に向けた提案をすることを目的として、法廷通訳経験者を対象としたアンケート調査を 3 回にわたり実施した。2012 年調査では法廷通訳人の負担に焦点をあてた。2017 年調査では、「誤訳の問題」「裁判所による通訳人研修」の項目を加えた。2022 年調査では、これまでの調査項目に加えて、新型コロナ禍以降の法廷通訳人の業務量や労働環境の変化、遠隔通訳導入の状況等についての調査も実施した。

2. 調査の概要

- ・調査対象:国内で法廷通訳の経験がある方。
- ・調査方法:オンラインで回答できる調査票(Google フォーム)使用。サンプリングは機縁法。
- ・言語:日本語。
- ・調査時期:2012 年 12 月-2013 年 1 月、2017 年 2 月-4 月、2022 年 2 月-3 月。
- ・有効回答数:2012 年 101、2017 年 55、2022 年 36。

3. 結果と考察

今回は、3 回の調査の共通の調査項目である「法廷通訳にとっての負担」「訳しやすい／訳しにくい日本語」と 2017 年からの項目である「通訳人研修」について取り上げ、3 回の調査を比較検討した結果を報告する。

詳細は発表時に報告するが、法廷通訳人が法廷通訳をして感じる負担は 2012、2017、2022 年の 10 年を経ても改善されていないことがわかった。法廷通訳人の疲れ、ストレス、心理的負担が高く、法曹三者の発言が訳しにくいと感じている通訳人も減っていない。また、研修については、本調査の協力者は比較的法廷通訳人として中堅かベテランの方が中心で、受講生としてだけではなく講師としての参加が多く、研修に求めるレベルが 2022 年の方が高くなっていた。全体としては、一貫して、法廷通訳人の人材確保、環境整備(法曹関係者との意見交換、通訳人同士の交流の場、情報のヘアなど)が必要な状態にあるといえる。

【参考文献】

高畠幸・水野かほる・津田守・坂巻静佳・森直香(2013)「法廷通訳の仕事に関する実態調査」『国際関係・比較文化研究』12-1:177-189

第2日目(9月4日) Zoom C 10:50 – 11:20

C-3 司会: 水野 真木子

Pragmatic Issues in Interpreting the Silence of a Defendant at Trial

Jihyeon Kim (Waseda University)

This paper presents findings on how the speech behavior of interpreters can influence the contextual meaning and interactions between court participants when the defendant remains silent in trials. Insights into the importance of pragmatic considerations in interpreting have been discussed in several studies based on empirical data from adversarial courtrooms (e.g. Berk-Seligson 1990/2002; González et al. 1991/2012; Hale 2004). However, the lack of practical examples linking these findings in the Japanese legal context makes it difficult to address the implications of pragmatism in actual practice. This paper focuses on a case where a Canadian defendant remained silent during his trial for charges of assaulting a police officer, which was interpreted into Japanese and English by a court interpreter. The Japanese-English interpreted discourse was collected from the author's fieldwork in the Tokyo District Court conducted between July and August 2019. A range of scenes were extracted from the author's field notes to identify verbal roles by the interpreter in a pragmatic sense when the scope of their role was limited in terms of communication assistance for the accused and other court participants. However, their attendance remained significant in ensuring the full exercise of the rights of defense and procedural fairness. In this case, the defense counsel repeated questions to clarify the uncertainty about the accused's willingness to engage in further questioning to refute the stance of the prosecution. The results were further analyzed to discuss how the interpreter treated the pragmatic meaning of the repetitions used by the defense counsel as cautionary advice, along with the consequences of the interpreter's verbal choice on further interactions.

【References】

- Berk-Seligson, S. (1990/2002). *The Bilingual Courtroom: Court interpreters in the judicial process*. Chicago/London: University of Chicago Press.
- González, R., Vásquez, V. F., & Mikkelsen, H. (1991/2012). *Fundamentals of Court Interpretation: Theory, policy, and practice*. Durham: Carolina Academic Press.
- Hale, S. (2004). *The Discourse of Court Interpreting: Discourse practices of the law, the witness and the interpreter*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

第 2 日目(9月4日) Zoom C 11:30 – 12:00

C-4 司会: 内藤 稔

英タイ同時通訳における直接話法と間接話法の使用:通訳利用者の視点から

スッカスイ・ベンチャラット(立教大学 D)

直接話法で通訳することはプロの通訳者の規範だとされる。例えば、原発言者が「私はアメリカから来た」と言った場合、通訳者は「彼はアメリカから来た」ではなく、「私はアメリカから来た」と言わなければならない。しかし、タイ語に通訳する場合、タイ語の文法上の制約により、通訳者は一人称代名詞及び文末詞を原発言者のジェンダーに合わせて選択しなければならない。そうすると、通訳者は異性の一人称代名詞あるいは文末詞を使用しなければならない状況が起こりうる。通訳者が異性の一人称代名詞あるいは文末詞を使用するのに抵抗があることは Sukgasi (2020)で指摘されたが、通訳者が異性の一人称代名詞及び文末詞を使用することに対し、通訳利用者がどのように思っているかといった調査が不足している。

そこで、本研究は通訳者と原発言者のジェンダーが一致・不一致のときに、通訳利用者はどのように人称代名詞及び文末詞を使用すべきだと考えるかを調べる。調査方法は、実験協力者を4つのグループに分け、Zoom 上でそれぞれ異なる動画を視聴してもらうことである。その後、アンケート及びインタビュー調査を実施した。有効回答者数は 118 人である。動画の場面は英語からタイ語への同時通訳で、原発言者は男性である。4つの動画の相違点は通訳者のジェンダーと話法の種類である。つまり、男性通訳者が直接話法で訳出した動画(MDS)、女性通訳者が直接話法で訳出した動画(FDS)、男性通訳者が間接話法で訳出した動画(MIS)、そして女性通訳者が間接話法で訳出した動画(FIS)がある。条件を揃えるために、女性通訳者はプロの女性通訳者に協力してもらったが、男性通訳者は音声分析ソフトを使って女性の声を男性の声に変換した。

本発表では、実験により得たアンケート結果及びインタビュー結果を報告し、タイ語の人称代名詞および文末詞に対する通訳利用者の考えを考察する。同時に、音声分析ソフトを利用した研究方法のメリットと限界についても言及する。

【参考文献】

- Sukgasi, B. (2020). English-Thai interpreters' use of direct style interpreting: the effect of gender-specific pronouns and formality-marking particles in Thai. *Intercultural Communication Review*, 18, 61-77.

第2日目(9月4日) Zoom C 13:00 – 13:30

C-5 司会: 内藤 稔

日中逐次通訳過程における言語処理のメカニズム:起点言語の難易度及び作動記憶容量を操作した実験的検討

宋 啓超 (広島大学 D)

通訳活動を遂行するにあたり、高い言語能力が要求される一方、通訳者が限られた時間内で異なる言語間のコードスイッチングを行わなければならない。つまり、通訳活動は即時的な言語処理能力を求める、認知的負荷が高い言語活動である(Rinne et al., 2000)。通訳過程によるこの一連の認知活動の下支えを担う心内の作業場として、作動記憶(working memory, 以下、WM)システムが重要な役割を果たすことが指摘されている(Mizuno, 2005)。近年、印欧語族の言語を中心に、2言語間の通訳過程における WM 容量の役割に関する検討が盛んになされ、通訳遂行時の 2つの言語がどのように処理されるかといった通訳者の認知メカニズムが解明されつつある(e.g., Dong et al., 2018)。では、ともに表意文字である漢字が使われている日本語と中国語(以下、日中)の 2 言語間の通訳メカニズムには、どのような特徴が見られるのだろうか。日中 2 言語間の通訳の特徴が印欧語族の言語とどのような類似点と相違点を有するのだろうか。

本研究は文章レベルの日中逐次通訳過程における情報処理のメカニズムを実験的に検討し、通訳の理解と产出の両過程における情報処理の様相を明らかにすることを目的とする。具体的には、起点言語(source language, 以下 SL)の難易度を及び WM 容量を操作し、言語要因と認知要因の両側面から中国語を母語とする日本語学習者が日中逐次通訳を遂行する際の処理過程を明らかにする。

実験的検討により、以下 2 点が明らかとなった。(1) WM 容量の大小、SL の難易度にかかわらず、限られた認知資源はまず SL への理解に費やされ、同時並行で目標言語(target language, 以下 TL)への検索が行われることが明らかとなった。つまり、文章レベルの逐次通訳においても水平的処理の説(parallel model)が支持された;(2) 同時並行で TL への検索の度合いは、WM 容量と SL の難易度によって異なることが明らかとなった。困難度の低い通訳材料の場合においては、WM 容量による影響は小さかったのに対し、困難度の高い通訳材料の場合においては、TL の产出成績に及ぼす WM 容量の影響が大きかった。これらの結果をふまえ、今後通訳訓練をする際に、通訳材料の難易度を操作することによって、学習者に注意配分の効率を高めることができると考えられよう。

【参考文献】

Mizuno, A. Process model for simultaneous interpreting and working memory. *Meta*, 2005(2): 739-752.

第 2 日目(9月4日) Zoom C 13:40 – 14:10

C-6 司会: 篠原 有子

Meaning-making process in AV discourse: to revise multimodal transcription method

Sirui Cheng (Sophia University, D)

Multimodal transcription method is used in many audiovisual translation(AVT) studies and considered as a useful tool for analyzing AV discourse. But the complicated analysis process, especially the last step “a metafunctional interpretation of how the film creates meaning” (Taylor 2003), is lack of explanation and makes it difficult in practice. Also, although the multimodal transcription method presents AV discourse on paper, the relations between audio channel, visual channel, and subtitle (or dialogue) remain unclear. Hence, the AVT studies with multimodal transcription method still have the tendency of focusing on linguistic level, and lack of the analysis on how audio and visual codes produce meaning and how the multimodal cohesion is achieved in the AV discourse. Therefore, a revise for the multimodal transcription method is needed to simplify the analysis process and make the method more practical in actual analysis. In the meantime, a logical explanation is needed to clarify the meaning-making process in AV discourse for the revision in order to decide which element is needed in the revised method.

In order to clarify the meaning-making process in AV discourse, reception study and discourse analysis are both considered helpful. From the perspective of reception study, how audience decode AV discourse is explained in several researches. Cheng (2022) made brief conclusions based on those researches (focused parts in visual channel, the continuation of audio channel produces meaning, the overlapped information in two channels benefits audiences' comprehension) and made a suggestion to revise multimodal transcription method. But the revised version is still complicated and it is difficult to make a conclusion on the meaning-making process only based on audiences' reception. The discourse analysis may provide a new perspective for exploring the meaning-making process. Wildfeuer (2014) suggested a model for film discourse interpretation, in which a logical explanation is illustrated of “how meaning in filmic text is constructed by means of inferential reasoning about its narrative composition” (2014: 19). Wildfeuer's model successes in making a logical explanation of how meaning is conducted in film (AV discourse), but it is considered ineffective while applying to AVT research and reception studies. So a simplified model is required for AVT study.

In this research, a simplified Wildfeuer's model will be used along with the conclusions made from reception studies to clarify the meaning-making process in AV discourse and the relations between different semiotic modes. And the meaning-making process could be applied to revise multimodal transcription method, as well as to other AVT studies.

【参考文献】

- Cheng, Sirui. “Audience Reception and a Revision of Multimodal Transcription Method”. *上智大学文化交渉学研究* 10 (2022): 49-71.
- Wildfeuer, Janina. *Film discourse interpretation: Towards a new paradigm for multimodal film analysis*. Routledge, 2014.
- Taylor, Christopher J. “Multimodal transcription in the analysis, translation and subtitling of Italian films”. *The translator* 9.2 (2003): 191-205.

第2日目(9月4日) Zoom C 14:20 – 14:50

C-7 司会: 篠原 有子

NAIST 同時通訳コーパスの構築:翻訳字幕との比較と通訳経験年数に基づく分析

土肥 康輔(奈良先端科学技術大学院大学 D)、須藤 克仁(奈良先端科学技術大学院大学)、中村 哲(奈良先端科学技術大学院大学)

本発表では、我々が構築した大規模な英日・日英同時通訳コーパス(NAIST 同時通訳コーパス¹; Shimizu ら, 2014; Doi ら, 2021)について述べるとともに、本コーパスを用いて行った同時通訳と翻訳字幕の比較、通訳者の経験年数に基づく分析について報告する。

近年の機械翻訳や音声処理技術の発展により、自動音声翻訳システムの研究が加速している。自動音声翻訳システムの構築には、原言語音声とその書き起こしと、対応する目的言語の翻訳テキストや翻訳字幕に基づく音声翻訳コーパスが用いられる。我々は自動同時通訳システムの研究におけるシステム構築や評価のための言語資源として、講演や記者会見を通訳者が実際に同時通訳した音声とその書き起こしを収録した NAIST 同時通訳コーパスを構築した。本コーパスは、通訳・翻訳研究においても、同時通訳の特徴やパフォーマンスの分析に用いることが期待できる。

同時通訳データの収録には、経験年数が異なるプロの同時通訳者が参加した。通訳者は、同時通訳の経験年数に基づき 3 段階にランク分けされている。通訳者には、発話の要約または書き起こしを事前に提示し、収録にあたっては、通訳者はヘッドセットを装着し、コンピュータでビデオを視聴しながら通訳を行った。2018~2020 年の期間に合計で 300 時間以上の英日・日英同時通訳データを収録し、その一部には、ランクが異なる 3 名の同時通訳者が同一の原文を訳出した、通訳結果を比較分析可能なデータ(通訳比較用データ)を含んでいる。

本発表における分析は、この通訳比較用データに含まれる 14 本の講演に対する英日同時通訳データを対象に、訳出遅延、品質、語順の観点から行った。原言語(英語)の文を基準として、原文と同時通訳の対応付けを人手で行った。さらに、このうちの 3 本については、同時通訳と翻訳字幕の対応付けを文節レベルで行った。これらのデータをもとに、訳出遅延、品質、語順に関する評価指標を算出した。また、プロの翻訳者 3 名による品質評価を行った。分析の結果、経験を積んだ通訳者は、遅延時間と品質のバランスをよりよく保てていることが明らかになった。また、遅延時間があまりに長くなると、同時通訳の品質に悪影響が生じていることが明らかになった。

【参考文献】

- Shimizu, H., Neubig, G., Sakti, S., Toda, T., and Nakamura, S. (2014). Collection of a Simultaneous Translation Corpus for Comparative Analysis, In *Proceedings of LREC*, pp. 670-673.
- Doi, K., Sudoh, K., and Nakamura, S. (2021). Large-Scale English-Japanese Simultaneous Interpretation Corpus: Construction and Analyses with Sentence-Aligned Data, In *Proceedings of IWSLT*, pp. 226-235.

【注】

1. コーパスの一部はウェブ上で公開している。 <https://dsc-nlp.naist.jp/data/NAIST-SIC/>

第 2 日目(9月4日) Zoom C 15:00 – 15:30

C-8 司会: 高橋 絹子

「多言語通訳コーパスを活用した日英・日中・日西の訳出比較に基づく初期的考察」

松下 佳世(立教大学)、古川 典代(神戸松蔭女子学院大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

近年、欧州では多言語通訳コーパスの構築が進んでおり、通訳研究者、並びに研究者グループが独自のコーパスを作成するケースも増えている。しかし、英語を含まない言語対の対訳コーパスは未だ発展途上にあると言える(cf. Doi, Sudoh & Nakamura, 2021; Russo, Bendazzoli & Defrancq, 2018)。本発表では、すでに構築済みの日英通訳の対訳コーパス(JNPC コーパス)に、新たに日中、日西を加えた多言語通訳コーパスの構築を目指す研究プロジェクトの成果と、日英・日中・日西の訳出比較の初期的な分析結果を報告する。

訳出データの比較にあたり、本研究では JNPC コーパスに含まれている素材のうち、2011 年と 2014 年に行われた外務大臣の記者会見データを用いた。会見時は、2 名の日英通訳者が日英双方向に訳出していたが、今回はその時の会見ビデオを用いて、新たに日中、日西通訳者による訳出を収録し、日英の訳出と比較した。

分析の結果、日英と日中の訳出にはいくつかの顕著な違いが見られた。例えば、日中両言語では共通の文化的意味を持つものの、欧米ではあまり知られていない表現が原文に含まれる場合、日中通訳者はすぐに中国語で対応する表現を訳出するのに対し、日英、日西通訳者は原発話にない説明を加える傾向が見られた。

また、日本語から中国語への訳出においては、英語からの借用語を訳出する際、中国語としては不自然な音訳を用いるケースが複数あった。これは、日英通訳者がカタカナを英語に置き換えれば済むのに対し、日中通訳者は、原語の意味理解だけでなく、音訳された言葉が日本語の文脈でどのように使われるかを知らなければ訳出できないため、遅延や誤訳につながった例もあった。日西の場合は、借用語の理解において上述の困難は見受けられなかったものの、英語とスペイン語では組織や条約などの正式名称や略語が異なるケースが多いため、スペイン語に訳出する際、英語の略語をそのまま用いたり(APEC など)、略語を使わずスペイン語の正式名称に訳したり(FTA を Tratado de Libre Comercio と訳すなど)と、ばらつきが見られた。

本研究は事例が限られており、分析結果は初期的なものにとどまるが、英語以外の言語と日本語の間の通訳についての実践的な研究の発展や通訳訓練の再考につながるものと期待している。

【参考文献】

- Doi, K., Sudoh, K., & Nakamura, S. (2021). Large-scale English-Japanese simultaneous interpretation corpus: Construction and analyses with sentence-aligned data. *Proceedings of the 18th International Conference on Spoken Language Translation, Thailand*, 226–235.
https://ahcweb01.naist.jp/papers/conference/2021/202108_IWSLT_kosuke-d/202108_IWSLT_kosuke-d.paper.pdf
- Russo, M., Bendazzoli, C., & Defrancq, B. (Eds.). (2018). *Making way in corpus-based interpreting studies*. Springer.
- 董海濤(2018)「プロの通訳者による逐次通訳と同時通訳の訳出率に関する比較研究—日本語から中國語への訳出を中心に—」『通訳翻訳研究』18 号:99–120.
- 楊潔冰・当銘盛之(2019)「日本語から中国語への訳出過程におけるコード・スイッチング」『通訳翻訳研究』19 号:75–96.

第2日目(9月4日) Zoom C 15:40 – 16:10

C-9 司会: 高橋 紗子

同時通訳における情報保持: 相関モデルの立場から

石塚 浩之(広島修道大学)

本研究では、実際の同時通訳記録の分析から通訳者の認知処理を推定し、同時通訳における情報保持が順送り訳において果たす役割を探る。同時通訳は起点テキスト(ST)を入力し、目標テキスト(TT)を産出する作業であるが、原発話者・通訳者・聞き手の間のコミュニケーションとしての側面に目を向けると、言語形式にコード化された意味の媒介により、原発話者と聞き手が非言語的概念を踏まえることで成立する行為ととらえることができる。本研究では「言語コミュニケーションにおける概念・意味相関モデル」(船山, 2020。略して相関モデル)の立場から、同時通訳における順送り訳を支える概念レベルの処理を記述するための枠組みを整理する。

同時通訳においては、文末を待たずに情報の流れに沿って訳出を行うという作業上の特色から、順送り訳が求められる。同時通訳とサイトラは順送り訳という点において共通しており、これを可能とするための処理は分割・保持・組換えの3つに分けて考察することができる(石塚, 2018)。言語的側面に注目すると、順送り訳は、STから切り出した断片を、順次、TTへと訳出していく作業であるが、これは単なる言語的置換ではない。安定した訳出のためには、目下の言語情報の断片的・逐次的処理に加え、ディスコースの全体を漸進的・全体的に概念的に理解する処理が必要である。この処理の実態を記述するため、本発表では、順送り訳に関わる3つの段階のうち、情報保持に焦点を当てる。

通訳者の認知処理は、同時通訳記録のSTとTTの間に観察されるさまざまな言語的差異から推定することが可能であり、通訳者による情報保持は、訳出の遅延・反復などを手がかりとして客観的に観察できる。訳出の遅延・反復は、いずれも同時通訳記録に頻繁に表れる現象であり、ST要素の訳出遅延、ST要素の訳出反復、STにない指示表現の訳出など、いくつかのタイプに分かれる。さらに保持される情報はSTに由来するとは限らず、各種文脈情報から推論により取得されるものもある。本発表では、JNPCコーパス(松下・山田・石塚, 2020)に収録された同時通訳記録を使用し、通訳者による情報保持の観点から訳出の遅延・反復などの言語的特徴を統一的にとらえ、同時通訳における順送り訳を言語表現レベルの操作を超えた概念レベルでの処理として記述する。

【参考文献】

- Ishizuka, H. (2013). Repetitive translation and conceptual processing in SI. *Interpreting and Translation Studies*. 12, 83-103.
- 石塚浩之 (2018)「サイトラにおける認知プロセス-分割・保持・組換え」『通訳翻訳研究への招待』第19号: 69-89.
- 石塚浩之 (2021)「順送り訳のための概念操作-英日同時通訳における指示表現の追加」*MITIS Journal* 2(1): 11-32.
- 船山伸也 (2020)『自然言語をめぐる秩序 概念化と言語化』開拓社
- 松下佳世・山田優・石塚浩之 (2020)「英日・日英通訳データベース(JNPCコーパス)の概要」『通訳翻訳研究への招待』第22号: 87-94.